

NGOセッション平和市長会議会長・広島市長スピーチ

コルネル・フェルツァ議長並びに御列席の各国政府代表、NGO関係者の皆様、広島市長の松井一實です。被爆地広島の市長として、また、平和市長会議の会長として、スピーチさせていただきます。

1945年8月6日、広島は一発の原子爆弾により廃墟と化し、14万人もの尊い命が奪われました。放射線による被爆者の苦しみは今なお続いています。

皆様、核兵器の非人道性について、改めてお話しさせてください。昨年8月6日に私が発した平和宣言の一節を朗読します。よろしければ、当時の光景を想像し目を閉じて聴いていただけないでしょうか。

1945年8月6日8時15分、私たちの故郷は、一発の原子爆弾により灰じんに帰りました。帰る家や慣れ親しんだ暮らし、大切に守ってきた文化までもが失われてしまいました。——「広島が無くなっていた。何もかも無くなっていた。道も無い。辺り一面焼け野原。悲しいことに一目で遠くまで見える。市電の線路であろう道に焼け落ちた電線を目安に歩いた。市電の道は熱かった。人々の死があちこちにあった。」——それは、当時20歳の女性が見た街であり、被爆者の誰もが目の当たりにした広島の姿です。川辺からは、賑やかな祭り、ボート遊び、魚釣りや貝掘り、手長えびを捕る子どもたちの姿も消えてしまいました。

皆様、広島市にはこのような悲惨な被爆体験を自ら書き綴った体験記が13万編以上寄せられています。広島・長崎の被爆の実相を見れば、核兵器は「非人道兵器」の極みであり、「絶対悪」であることは明らかです。この意味で、チェルノブイリや福島原発事故も警告を発するものでした。人類に対し、核の破壊的な力を故意に解き放つことは決して許されるものではないでしょう。このような兵器が合法的なものであってよいはずはありません。

被爆者は、言語に絶する悲惨な目に遭いながらも、憎しみや苦しみ、絶望を乗り越え、人間として、こんな思いを他の誰にもさせたくないという揺るぎない信念を抱き、この心からの願いを世界に発信し続けてきました。核兵器のない世界に向けて今、国際社会は、核兵器廃絶に向けた決意を確固たるものとするため、この被爆者の切実な願いに耳を傾け、その思いを共有すべきです。

現在の安全保障の枠組みは、国籍や人種、宗教が異なれば、人は互いに不信感や敵意を抱き、それが国家間での対立を生み出すことになりがちであるという考えに依拠するものです。この無差別大量殺戮の脅しにより安全を維持しようとする制度は、根本的に脆弱であり、次第に不安定になるものです。このような制度にいつまでも依存していてよいのでしょうか。今、相互不信の壁を乗り越え、同じ人間として深いレベルでの同胞意識に根ざした安全保障体制の構築が求められています。「核抑止力」を脱し、このような信頼できる安全保障体制の構築に向け、共に努力していく必要があるのではないのでしょうか。

昨今の北朝鮮による核開発や弾道ミサイル発射の動きにも被爆者は心を痛めています。北朝鮮は、脅しに依存して孤立の道を歩むべきではありません。平和と友好の中で共に繁栄を追求できる日が一刻も早く訪れることを願ってやみません。

ここにお集まりの各国政府代表者の皆様、同じ人間としての同胞意識に立ち、共に手を携え、新しいムーブメントを起こしていこうではありませんか。私は、昨年準備委員会以降、核兵器の非人道性に焦点を当て、「核兵器を非合法化」しようとする動きが加速しつつあることを心から歓迎します。また、来年春広島で開催される核軍縮・不拡散イニシアチブ(NPDI)の外相会合において、被爆の実相を直視し、被爆地から核軍縮に向けた具体的提案がなされることに大きな期待を寄せています。そうした中、核兵器を非合法化し、核兵器のない世界を実現するための「核兵器禁止条約」の交渉開始に向けた努力が極めて重要です。皆様のリーダーシップを心から期待します。

私が会長を務める平和市長会議には、今や 156 の国・地域から 5,587 の都市が加盟しています。その人口は世界の総人口の 7 分の 1 に当たる 10 億人に及んでいます。「核兵器禁止条約」の実現のためには、国や国際機関のみならず、私たち市民社会の幅広い活動と協調が大変重要です。平和市長会議は、世界中の多くの市民、NGO 等と連携し、その実現を懸命に後押ししたいと考えています。

存命のうちに核兵器廃絶を見届けたいと心から願う被爆者の平均年齢は78歳を超えました。「絶対悪」を取り払う努力が実を結び、一日も早い核兵器廃絶が実現することを心から願ってやみません。

御静聴ありがとうございました。